

千々石ミゲルが棄てたのは
「信仰」ではなかった——

千々石

Eigusa D Miguel

ミゲル

第1次-第4次発掘調査

夫妻伊木墓所

永徳院

安徳

十四日

自性院

十二日

寛永九年十二月

千々石ミゲル墓所調査プロジェクト

■天正遣欧使節と千々石ミゲル

1582年(天正10)に九州のキリシタン大名たちがローマ法王のもとに派遣したとされる天正遣欧使節、その4人の少年の一人が千々石ミゲルである。キリシタン大名・大村純忠の甥、有馬晴信の従弟にあたり、帰国後イエズス会に入会するが、それから約10年後には退会し、キリスト教の信仰も捨てたといわれていた。イエズス会退会の後、キリシタン王国時代の大村藩主・大村喜前や日野江藩主・有馬晴信に仕える。その後、長崎に移住したといわれるが、その晩年は不明であった。

■千々石ミゲル夫妻の墓発見

諫早市多良見町山川内のミカン畑に覆われた丘陵の中腹に自然石の巨大な墓石が建っている。正面右に「自性院妙信」、左に「本住院常安」という被供養者の戒名が刻まれており、「妙信」は寛永9年12月12日(1633年1月19日)に没し、「常安」はその二日後に没したことがわかる。裏面にはミゲルの四男にあたる「千々石玄蕃允」の名が刻まれている。墓は、大村藩の城代家老を務めた浅田家の所有地にある。浅田家には千々石玄蕃の娘が嫁いでおり、浅田家に遺る古文書にもこの墓について記されている。これらのことから四男玄蕃によって建てられたこの墓の被葬者が、千々石ミゲルとその妻であることが大石一久によって唱えられたのは2003年であった。

■第1次・第2次調査(2014年9月、2016年9月)

墓所の建立当時の姿を確認するために第1次調査、第2次調査を実施し、墓石が建てられていた一辺2.8mの基壇が明治時代のはじめ頃に整備され、墓石が本来の位置でないことが明らかになった。ただ地中レーダー探査では基壇の下層に墓壇(遺体を納めた穴)の存在を推定させる反応があった。

■第3次調査(2017年8～9月)

第3次調査では基壇を解体し、下部の調査を実施した。その結果、基壇の北部下部から遺体の埋葬施設を検出し(1号墓壇)、さらに東側でも新たにもう1基の埋葬施設の一部を検出した(2号墓壇)。1号墓壇では長持を棺として埋葬された女性の遺骨を検出した。さらにその胸元からガラス板片やカラス玉などの遺物が発見された。

■第4次調査(2021年8～9月)

今回の第4次調査では2号墓壇の調査を実施し、成人男子の遺骨を検出した。さらに墓石が本来建てられていた位置を確認し、千々石ミゲル夫妻伊木力墓所の造営過程や構造を明らかにすることができた。



千々石ミゲル夫妻伊木力墓所(左下白テント)と大村湾を南側上空より望む



第4次調査前の墓石



第4次調査の調査風景



1号墓壇の蓋石



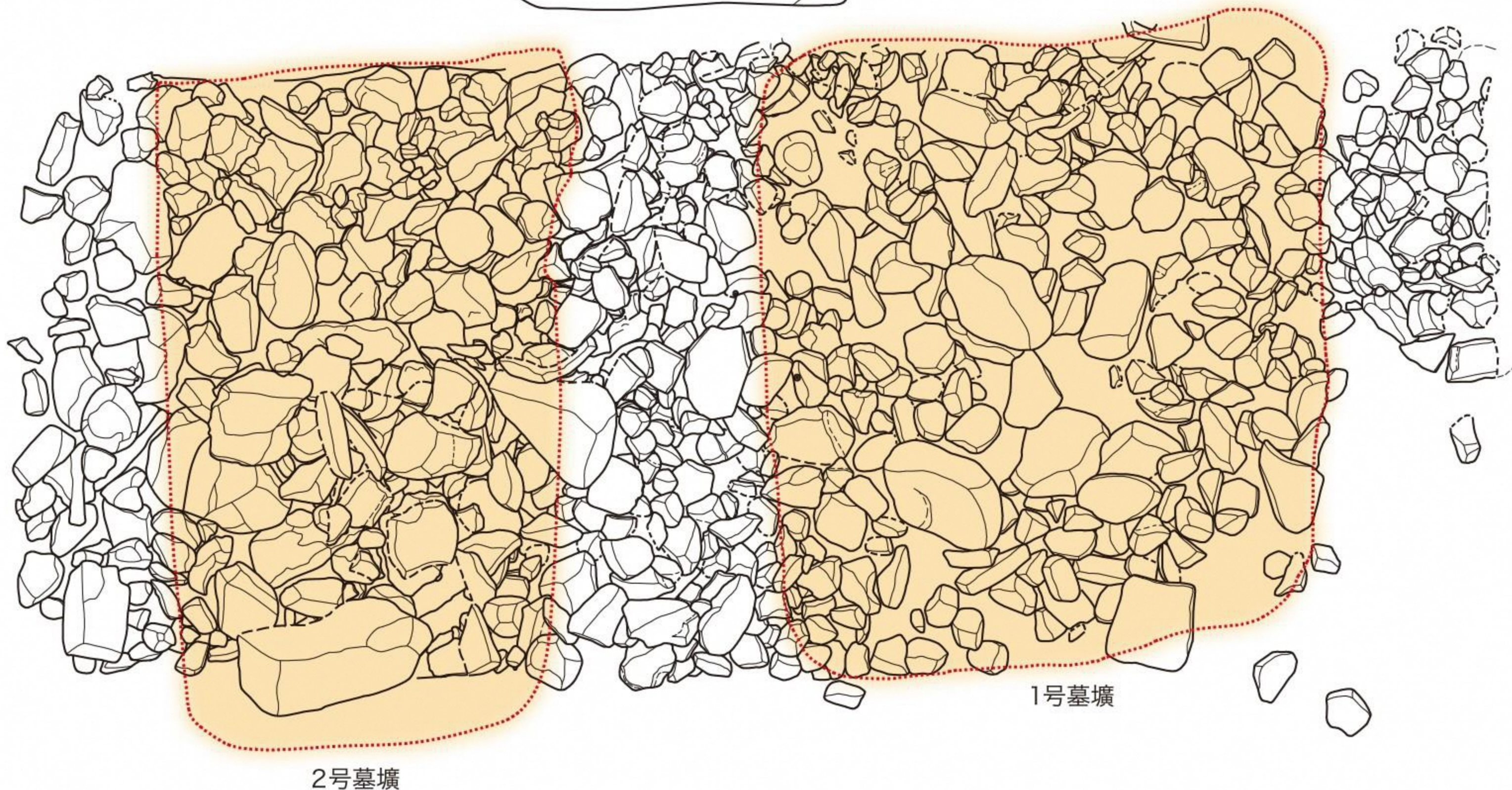
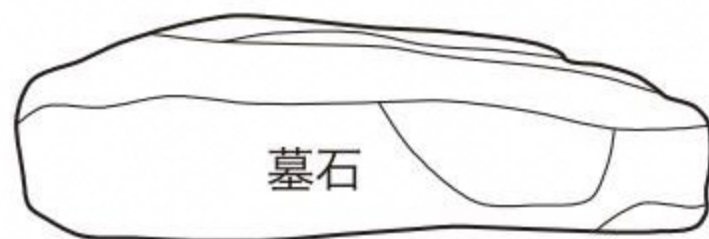
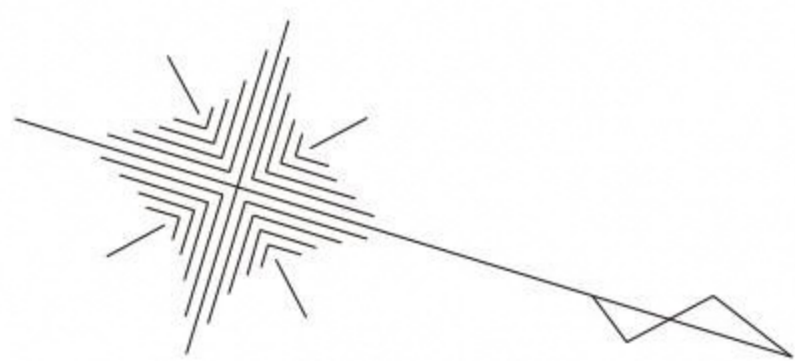
1号墓壇の蓋石の一部除去



2号墓壇の完掘状況

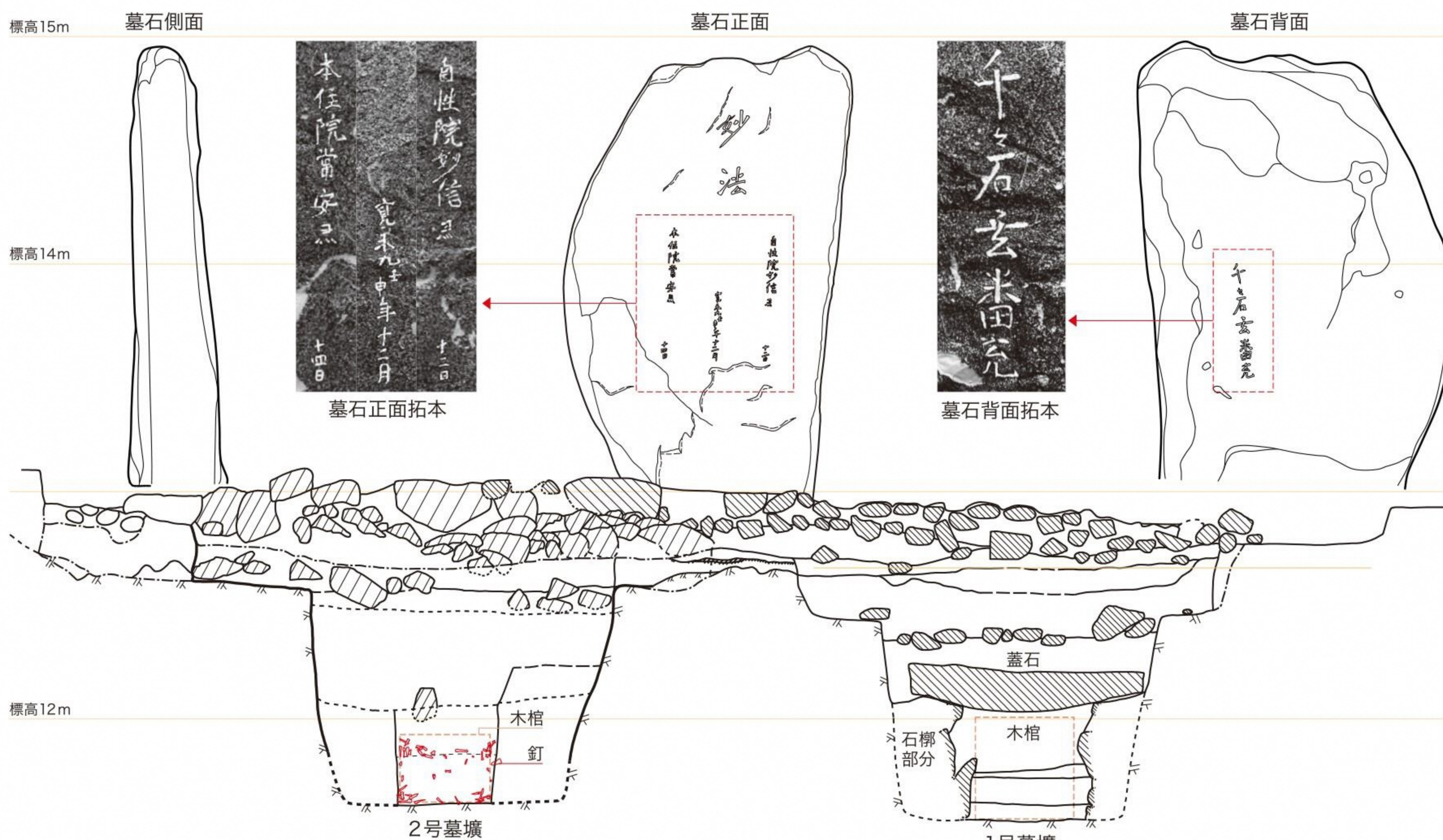


千々石ミゲル夫妻伊木力墓所の復元



集石遺構：墓石と1号墓壇・2号墓壇の位置

0 0.5 1.0m



墓石と復元断面図

(近代に造られた墓所基壇を除去し、墓石を造営当時の位置に復元した)

0 0.5 1.0m

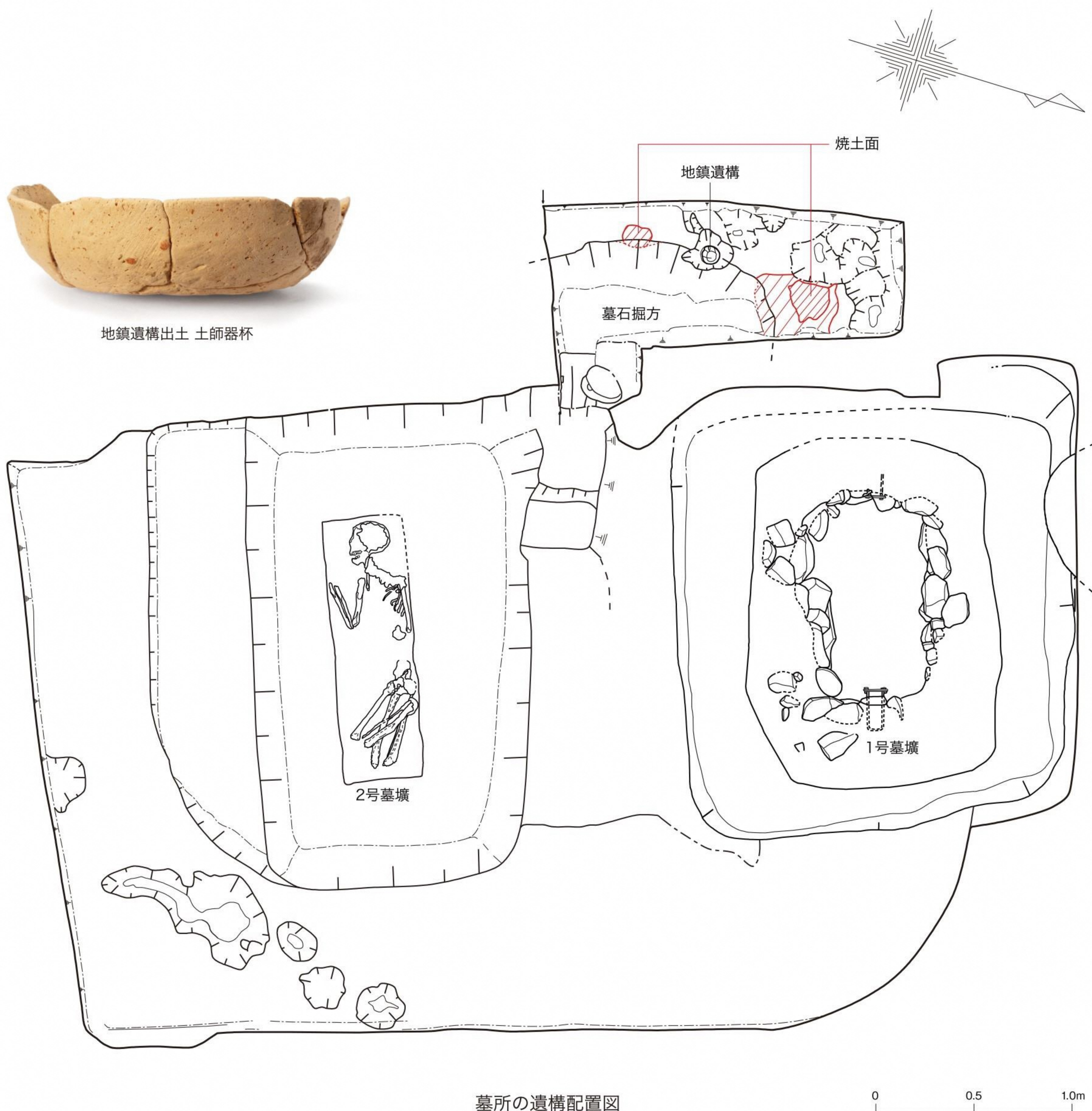
■埋葬より先に建てられた墓石

石組遺構の東西辺中軸の北側、1号墓壙、2号墓壙の中間部の北側から、現況で長さ1.1m以上、幅0.8m、深さ0.3mの平面長円形の土坑を見出した。この土坑は規模が、墓石の基部の大きさとおおそ合致することから墓石の造営当時の掘方(墓石を立てるための坑)と考えられる。また、近接して円形の小穴が掘られ、その中に、土師器杯の完形品が裏返して置かれた状態で出土した。杯の下には長さ約9cm、幅約2.5cmの円礫が置かれていた。これはおそらく墓石を立てる際の地鎮的な意味合いを持つものと考えられる。この周辺には2か所焼土面も発見されており、造営に伴う儀礼的行為の痕跡であると思われる。

墓石を建てたのちに周囲を固めた礫混じりの整地層が1号墓壙と2号墓壙によって切られていることが判明したので、墓所造成の工程の中で墓石は埋葬に先立って建てられたことが明らかになった。

■集石遺構

1号墓壙、2号墓壙の全体を覆うように人頭大から拳大の安山岩礫が乱雑に厚さ30cm前後に積み上げられた状態で検出された。南北約4.8m、東西約2.1mの長方形を呈す範囲である。集石遺構の下部からは2基の埋葬施設が検出された。ふたつの墓壙に切り合いはなく、主軸をそろえていることから、ほぼ同時に設けられたものと考えられる。



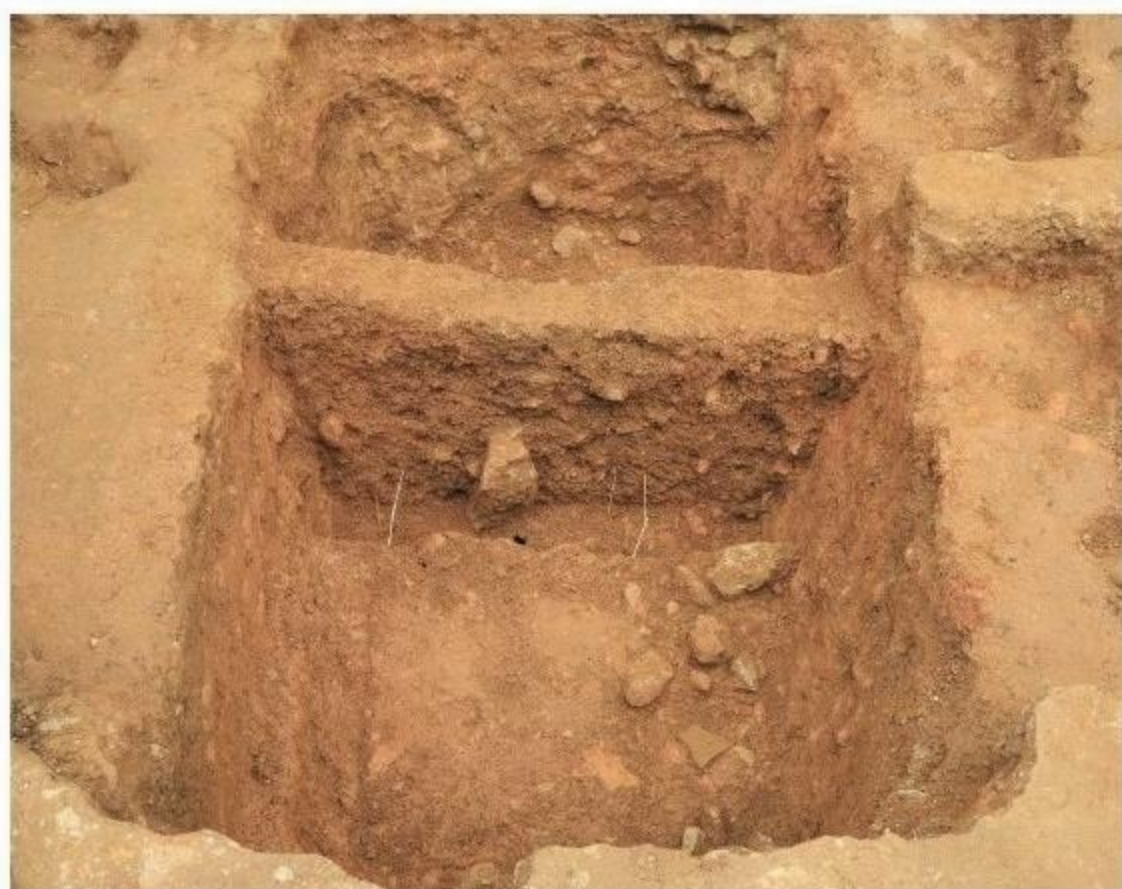
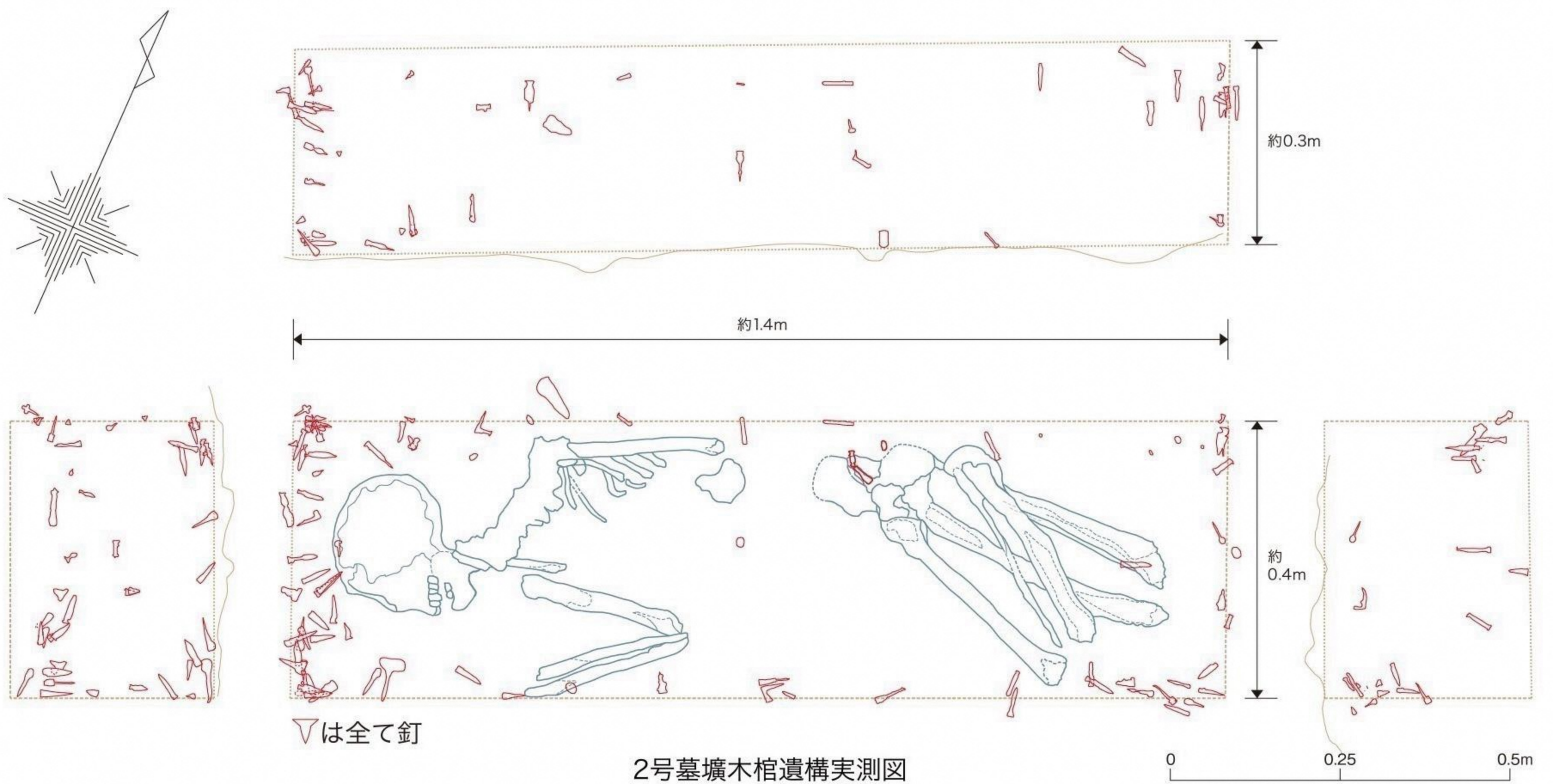
2号墓墳の被葬者

■ 2号墓墳の状況

今回の第4次調査で確認した2号墓墳は、東西約2.5m、南北約1.3m、深さ約1.0mを測る。墓墳の底に長さ約1.40m、幅約40cm、深さ約30cmの木棺が納められていた。棺に打たれていた鉄釘の総計は100点近くを数える。遺体の頭部側の小口から多数の釘が検出されている。

■ 2号墓墳の被葬者

被葬者は西側に頭を置き、腕を曲げ、さらに足を極端に曲げた側臥屈肢(横向きで足を曲げる)の姿勢で埋葬されていた。大腿骨、寛骨、脛骨、腓骨、足骨、前腕骨、上腕骨、肋骨、肩甲骨、下顎骨、上顎歯、下顎歯、前頭骨、頭頂骨・側頭骨から後頭骨などが遺存していた。2号墓墳の被葬者は成人男性である。



2号墓墳の断面



頭骨・腕骨・肋骨の出土状況



下肢骨の出土状況



人骨全体の出土状況



木棺の鉄釘

■ 1号墓壙の状況

1号墓壙は上下二段に掘った墓壙の底に長持を転用した棺が納められていた。墓壙の上段は一辺2m前後の正方形を呈し、深さは40cm前後である。下段は東西約1.6m、南北約1.2m、深さ約80cmを測る。棺は長さ約100cm、幅約50cm、高さ約50cmを測る。墓壙の底に納められた棺と墓壙の間には人頭大から拳大の礫を詰めていた。棺の上部には3枚の大きな石材が置かれていた。さらにその上部は礫と土砂によって丁寧に埋められていた。

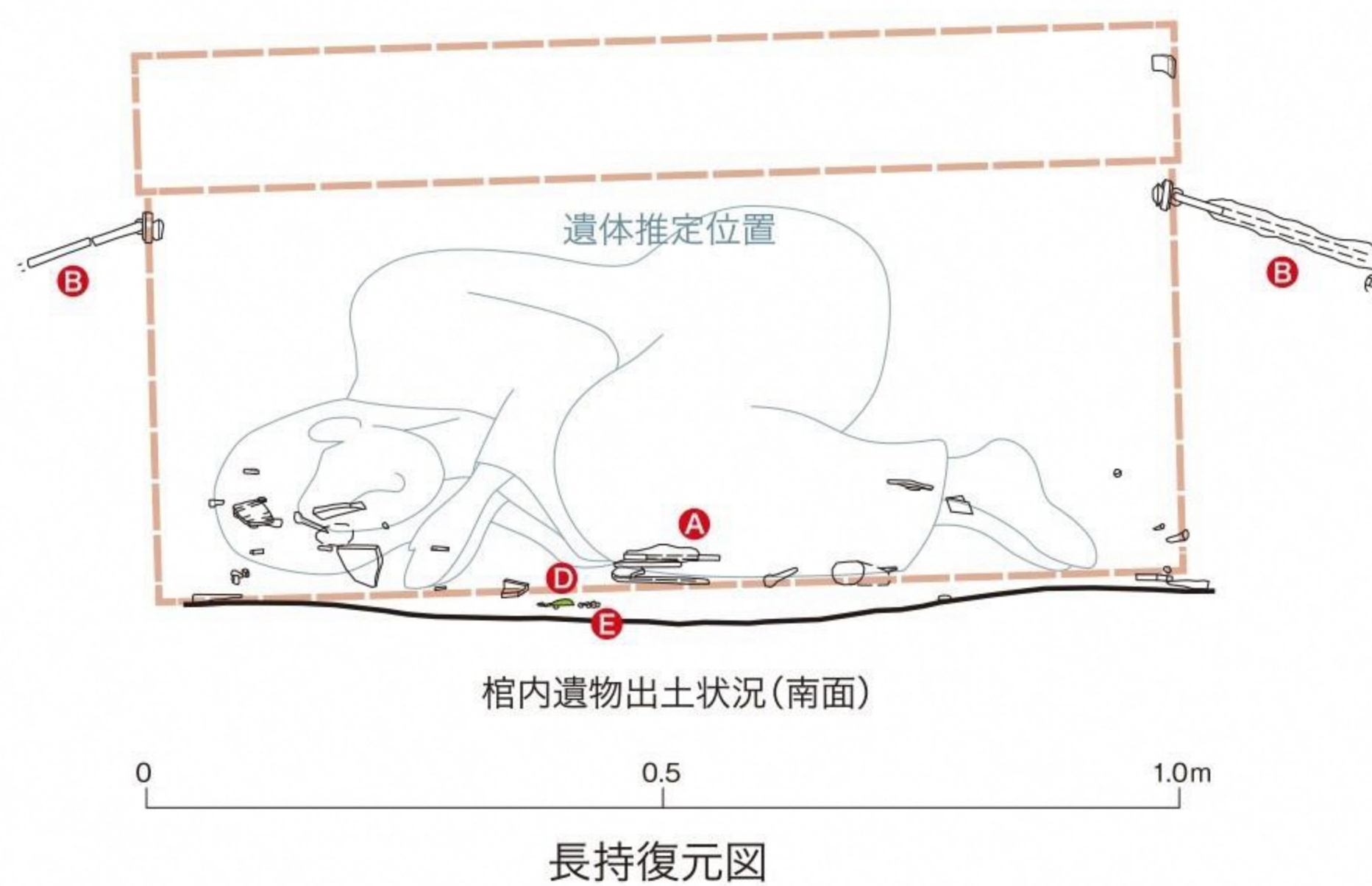
■ 棺に転用された長持

1号墓壙からは棺に転用された長持を構成する錠前、角金具、蝶番、竿通し、釘など金属製品が原位置を保って出土した。錠前は鍵がかかった状態であり、鍵は検出できなかった。被葬者を長持に納め、錠前の鍵をかけて埋葬したのである。



■ 1号墓壙の被葬者

棺内からは被葬者の大腿骨などの遺骨と歯の一部が確認された。成人女性のものと推定される。遺体は2号墓壙と同方向で同じ側臥屈肢の姿勢で棺に納められていた。被葬者の胸辺りからガラス玉59点、板ガラス片1点とそれに付随する繊維片が出土した。キリシタンの信仰具が被葬者の胸にかけられていたと推定される。この女性は墓石に刻まれた「自性院妙信」、すなわちミゲルの妻であると考えられる。



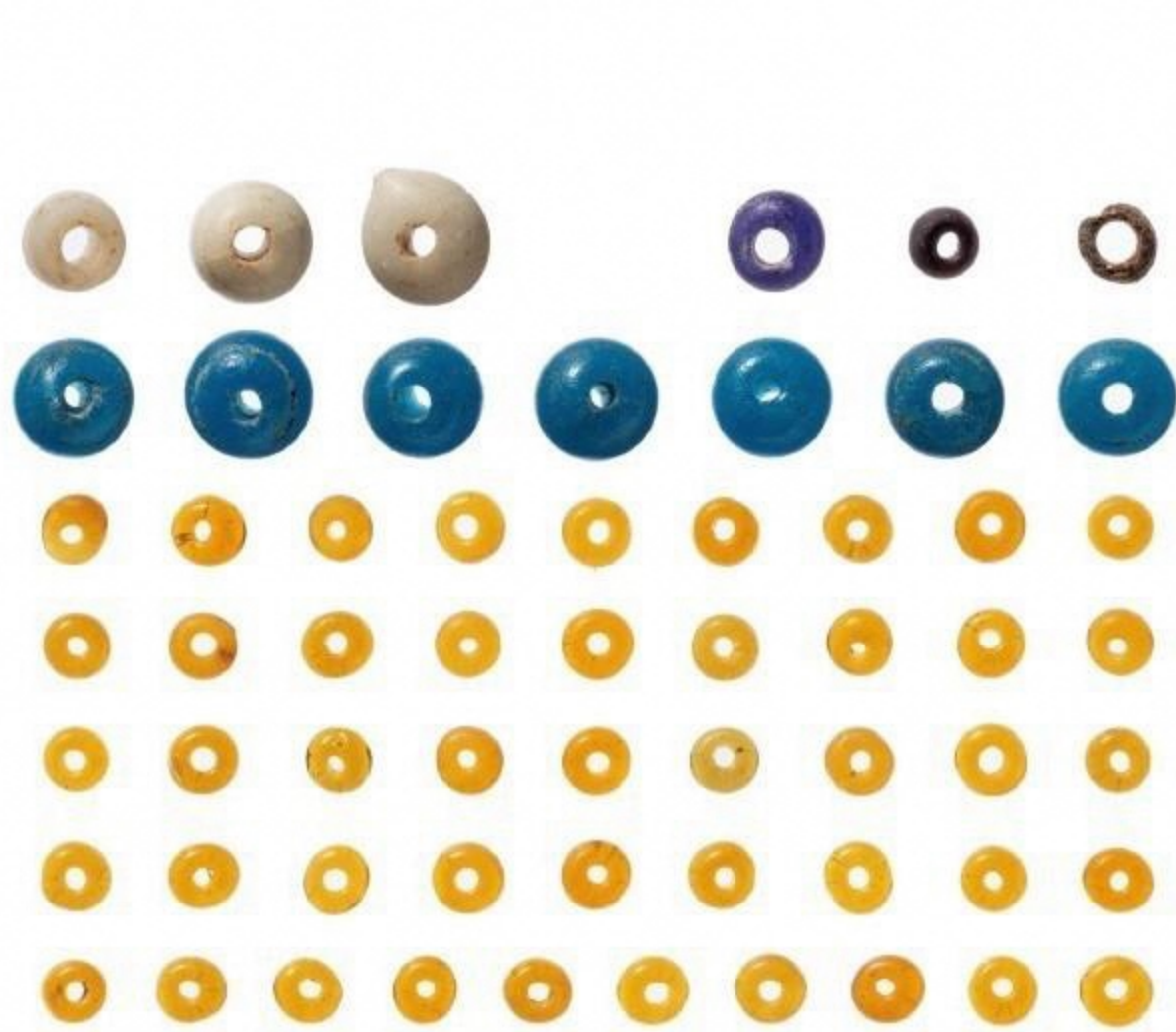
■1号墓壙から出土したキリシタン信仰具

板ガラス片はアルカリガラス片で現存長約27mm、現存幅約15mm、厚さ約1.5mmを測り、本来楕円形を呈す。表面には汚れによる色変わりがみられ、近辺から出土した繊維片によって縁取りされていたと推定される。

玉類は大きさから三種類に分類できる。直径5mm前後(白色

玉、青色玉)、4mm前後(紺色玉、黒色玉)、3mm以下(琥珀色玉)であり、一部鉛ガラス製のものも含まれるが、大部分がアルカリガラス製である。

板ガラス片と玉類、そして繊維片は一連の遺物として被葬者の胸元に掛けられていたと推測される。



1号墓壙出土 玉類⑤



1号墓壙出土 三種類の玉類⑤



1号墓壙出土 板ガラス片④



1号墓壙出土 長持金具・錠前①



1号墓壙出土 長持金具・竿通し③



1号墓壙出土 長持・釘類

■千々石ミゲル夫妻伊木力墓所の全体像

今回の第4次調査によって千々石ミゲル夫妻伊木力墓所の全体像が明らかになった。墓所を造営するにあたって削平と整地が施され、地鎮のための儀礼をおこない、山際の墓所のもっとも奥まった場所に墓石が建てられた。その後に2基の埋葬施設を造営して、埋葬施設を覆うように長方形の集石遺構を造り地上の標識としたのであろう。

通常は埋葬後に墓石を建てるが、この墓所では墓域を設定するかのよう、埋葬と同時に墓石を設置している。これが本遺跡の大きな特徴である。

並列して築かれた2基の墓壙に切り合い関係はなく、さらにそれぞれ埋め戻し後に、その上部に集石遺構を一体的に構築していることから、ほぼ同時に造営埋葬されたと考えられる。墓石に刻まれた「自性院妙信」「本住院常安」、ミゲルとその妻の没

年月日は二日の差しかない。二つの墓壙については考古学調査の成果とも矛盾しない。

2基の埋葬施設の被葬者は、その遺骨から成人の男子と女子であることが判明した。墓石に刻まれた銘の分析から千々石ミゲル夫妻の墓所とされてきたが、墓所の考古学調査により墓石の銘文を実証したといえる。

妻は胸にキリシタンの信仰遺物をもって鍵をかけた長持に納めて埋葬されている。キリスト教を棄教したと考えられてきた千々石ミゲルの妻の信仰を示すものである。ミゲルの墓からは副葬品の出土は見られなかった。しかし一般的にキリシタン墓では副葬品の出土は著しく少なく、また妻と同じ埋葬姿勢でほぼ同時期に埋葬されていることから、ミゲル自身も妻と信仰を共有していたとしても不自然ではない。



■千々石ミゲル夫妻伊木力墓所の意義

千々石ミゲル墓所第4次発掘調査は、2021年8月23日から9月28日の約一か月間実施され、その後約6か月をかけて出土遺物の分析などが各専門の研究者によって行われた。それらの結果を踏まえて、本年2022年4月22日に第三回指導委員会（委員長：谷川章雄早稲田大学人間科学学術院教授、前日本考古学協会会長）が開催され、これまでの発掘成果と当墓所を千々石ミゲル夫妻墓所と特定した大石一久の研究成果を再度検討した上で、「当墓所が千々石ミゲル夫妻の墓所であると確定する」との結論を得た。

また、当墓所は、被葬者の戒名を刻んだ地上の墓石、地下の埋葬遺構、副葬品、人骨という遺跡としての墓を構成する要素がすべてそろった近世初頭の稀有な遺構である。さらにその被葬者が千々石ミゲルという歴史に名を残す著名な人物であったことも、考古学上特筆すべき遺構であると考えられる。

■千々石ミゲル墓所調査へのご支援・ご協力に感謝します

2021年夏に行いました千々石ミゲル墓所調査プロジェクトの第4次発掘調査は、多くの皆さまのご支援で成立しました。

延べ240名の皆さんから7,548,378円のご寄付をうけました。さらにクラウドファンディングでのご支援は延べ459名の方から10,400,000円に達しました。

また多くのおみなさまから賛同のお言葉に加えて、有形・無形のご支援とご後援・ご協力をいただきました。

たらみ歴史愛好会、千々石ミゲル研究会、千々石ミゲル会・諫早、大村歴史懇話会、千々石ミゲル研究・顕彰会、長崎県石材加工組合連合会青年部、株式会社ハウジングロビー、Cozy Vision、株式会社長崎国際テレビ、小浜食糧株式会社、Free Hand、摂河泉地域文化研究所、山本書院グラフィックス（順不同）の各団体のご支援、さらに多くの個人の皆さまのご支援に感謝いたします。

2014年の第1次調査以来、諫早市文化振興課には多大なるご指導・ご協力を賜っています。

天正遣欧使節・千々石ミゲルの墓所を確定するという大きな学問的成果は、多くの民間のおみなさんのお力添えのなかで達成できました。たいへん誇らしく思います。ほんとうにありがとうございました。

千々石ミゲル墓所調査プロジェクト

■代表：浅田昌彦 ■副代表：井手則光、町田義博 ■調査統括：大石一久
■発掘調査担当：田中裕介 ■事務局長：渡邊享介 ■会計：北島美智子
■顧問：池辺晋一郎、加藤茂孝、朝長万左男、光田明正（順不同）
■相談役：一力昭子 ■発掘調査業務委託：株式会社オリエントアイエヌジー
■広報支援委託：一般社団法人プラスアイエヌジー（代表理事：中島靖人）

千々石ミゲル墓所調査指導委員会

■委員長：谷川章雄 ■副委員長：久田松和則
■委員：浅野ひとみ、小林義孝、宮崎賢太郎、山田順（順不同）



■千々石ミゲルと天正遣欧使節年表

1563年(永禄6)	大村純忠、洗礼をうけて日本最初のキリシタン大名となる。
1569年(永禄12)頃	ミゲル、千々石城城主・千々石直員の次男として誕生。（現在の雲仙市千々石町）
1573年(天正元)頃	4歳の時、故あって乳母に抱えられて大村に移る。
1574年(天正2)	大村純忠、領内の神社仏閣を破壊して全領民をキリシタンにする。（キリシタン王国建設へ）
1580年(天正8)	ミゲル、有馬セミナリヨの第一期生として入学。ここで伊東マンショ・原マルティノ・中浦ジュリアンとともに使節に選ばれる。
1582年(天正10)	ミゲル、天正遣欧使節の第二正使として長崎を出港。（第一正使は伊東マンショ）
1584年(天正12)	天正遣欧使節、リスボンに到着。同年、スペイン国王フェリペⅡ世に謁見。
1585年(天正13)	天正遣欧使節、ローマ教皇グレゴリウス十三世に枢機卿会議の中で謁見。
1587年(天正15)	大村純忠、大友宗麟が死去。同年、豊臣秀吉によるバテレン追放令。
1590年(天正18)	天正遣欧使節、長崎に帰着。
1591年(天正19)	京都・聚楽第で秀吉に謁見。西欧音楽を披露。同年、ミゲルら4人、天草でイエズス会に入会。
1601～1603年(慶長6～8)	このころ、ミゲル、イエズス会を脱会。その後、キリシタンが盛んな大村藩主・喜前に仕え、名を清左衛門と改める。
	食禄として伊木力・神浦600石を拝領する。
1606年(慶長11)	大村藩でバテレン追放。この後、ミゲル、キリシタン王国時代の有馬晴信に仕える。
1608年(慶長13)	伊東マンショ・原マルティノ・中浦ジュリアン、司祭となる。
1612年(慶長17)	日野江藩(有馬晴信)、キリスト教を禁止。その前後に、ミゲル、「日本のローマ」とよばれた長崎へ移る。（多くの有馬キリシタンも移る）
	同年、伊東マンショ、長崎にて病死。
1614年(慶長18)	12月、全国に禁教令。
1622～1623年(元和8～9)	このころ、ミゲル、長崎に住んでいるという噂。（「アフォンソ・デ・ルセーナの回想録」）
1629年(寛永6)	原マルティノ、追放先のマカオで病死。
1633年(寛永9)	1月21日、ミゲル、潜伏キリシタンの集住地・伊木力にて死去。（享年64歳か）
	10月21日、中浦ジュリアン、長崎(西坂)で穴吊りの刑で殉教。

